

天文月報 100 巻に寄せて： 思い出すこと

佐藤 修 二

〈名古屋大学大学院理学研究科 〒464-8602 名古屋市千種区不老町〉
e-mail: ssato@z.phys.nagoya-u.ac.jp



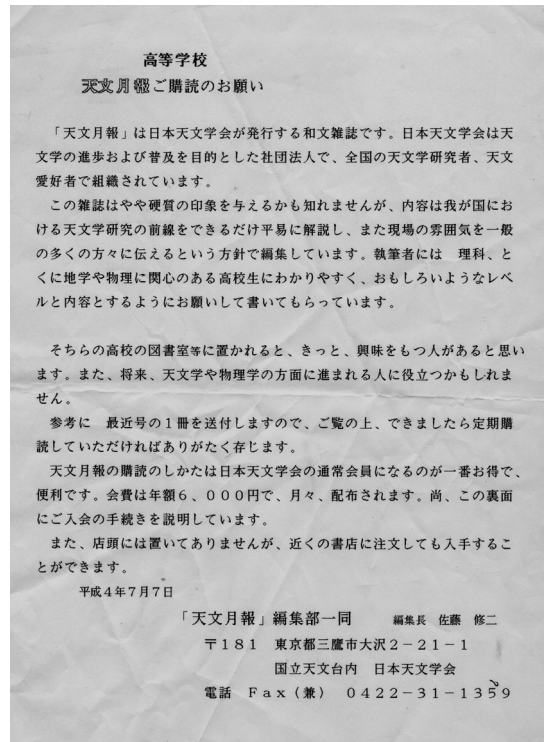
天文月報 100 巻とのこと、何ごとも長く続けること自体価値あること—この歳になって！—と身に沁みて感じます。私も一時期その天文月報編集長を勤めたことを誇らしく思います。私が天文月報の編集長の役を仰せつかったのは、1991. 5～1993. 5 の 2 年間だったそうです。その後の多事に取り紛れて忘れていました。往時茫々、記憶を拾い探してみます。

編集長の仕事は私にとって満更でもなかったのかもしれませんが、興にのったのか 2 年間で三つのことをしました。

一つは、この小冊子を全国の高校生に知らせたいと考えました。私は元々物理出身だったせいで大学院から天文学の勉強を始めました。天文月報に載る記事を見て現代天文学の動向を知りましたから、色気を出して販路を拡げたいと思いました。天文学会は営利団体ではないので天文月報は店頭には並べられないことを知りました。そこで 1992 年の 85 巻・7 号を 1,000 部ほど増刷して全国の高校宛てに DM (ダイレクトメール) で送付しました (その時の手紙・写真)。結果は芳しくなく、あまり購読者数は伸びず (数十部)、掛かった費用とトントンだったと思います。

二つ目は、紙面と欄の分類を明確にしようと考えました。天球儀、スカイライト、星空市場などの欄はその時の産物です。

三つ目は、色刷 (「青」と「赤」を加える) を考えました。まず「青」を加えました (第 85 巻 1 号より)。次に「赤」を……、と思ったのですが、ど



うしても会計のほうが先に赤字になることがわかりました。いまだに「赤」は加わっていないようです。

編集長時代はわずか 15 年前の出来事だったのですが、その後、浪々の身となって、いろんなことごとに取り紛れてあらかた忘れてしまいました。手元にはその時期の月報のみが欠本となっています。編集会議の開かれた、あの床の軋む木造の狭い部屋はまだ残っていますか？